



四万十町
町内 **ぶら〜り** 散策

ひがし
東
まち
町



役

場西庁舎前を南へ。吉見川を渡るとすぐ国道381号と交わる五叉路がある。その五叉路を左折（東へ）した国道の両側が東町である。予土線の高架をくぐって150mほどである。その信号から先は古市町である。

江戸初期に、現在の新開町、本町の順で発展してきたのだが、その延長線上にあるこの東町は近代になるまで、その大部分が田畑であった。戦後しばらく経ってから、徐々に宅地化されてきたようであるが、その成り立ちを見ていくと、本町が拡大して形成されてきただけではなく、古市町の発展とも密接に関わっていることがわかる。

古市町も昭和40年代までは、その一帯が田畑であった。現在、国道56号と381号が交わる交差点から381号に入ってすぐのところにスーパーマーケットがあるが、ここももちろん田畑であった。ところが昭和40年代後半に日本中に巻き起こったボウリングブームにのって、なんと、ここにボウリング場ができたのである。

ボウリング場建設にあたって、農地を埋めるために、すぐ南にある山からたくさんの人が土を運んだ。皆



吉見川に架かる日乃出橋の東には冷泉が湧いていたという

自前のリヤカーを引き、一車あたりいくらかの金額を設定し、一日幾度も土を運んだのだそう。各リヤカーには、一回運ぶごとにハコを押して貰うためのカードのようなものが貼ってあったと

いう。そして、いよいよ窪川の街にボウリング場ができたのであった。ブームが去るまでは、なかなかにぎわったようで、そのにぎわいはこの周辺の発展に勢いをつけた。

街の形成とはおもしろいものである。商業施設であれ文化施設であれ、新しい人の流れを作る「何か」ができることにより、それが起爆剤となり、その周辺に人が住み始める。東町の場合、西から張り出してくる本町の住宅地拡張の流れと、東から漂ってくるボウリング場による人々のにぎわいに挟まれるようなかたちで、あつという間に街が形成されたのである。さらに、国道や鉄道の整備がこれに拍車をかけたのは言うまでもない。

東西に約150m、南北に約100mの東町の真ん中を国道381号が走る。この地区には現在76世帯、129人が暮らしている。

町のうごき

(7月31日)	人口	前月比	出生	死亡	転入	転出
男	8,320	-9	男 8	8	9	18
女	9,273	-11	女 6	17	16	16
計	17,593	-20	計 14	25	25	34
世帯数	8,598	-8	(8月中の届出)			
窪川地域	12,362人		大正地域	2,501人	十和地域	2,730人

四万十川の水質状況

	適正值(mg/l)	9月3日
リン酸	≤ 1.0	0.243
硝酸	≤ 0.5	測定範囲以下
アンモニウム	≤ 5.0	測定範囲以下
アニオン活性剤	≤ 1.0	0.05
化学的酸素要求量	≤ 10.0	0.564

調査：大正（吾川）
資料：四万十高校自然環境部